

学者と講師

中林 幸夫

(会員 香川県綾歌郡国分寺町)

昨年は歴史学者の発掘捏造事件により歴史学会は混乱を招いた。

昔から講師、見てきたような嘘を云いといわれていくように数学や科学の世界と違って物事をはっきりと決められない歴史学には疑うべき問題が多い。

それがため学校の教科書まで書き換えなければならぬことがある。

本匠村の聖嶽のことも昨年は問題にされた。

リーフデ号の黒島漂着説にしてもシャチバイと佐志生の発音が似ているというだけで東大の岡田章雄教授が漂着地を臼杵市に決定しているがこれも確証のない決定は捏造の一つである。

私が現在住んでいる国分寺町には古代に国分寺があり、その礎石が残されている。

昨年、町では国分寺史跡まつりを開催して国分寺をアピールするために史跡巡りなどいろいろな行事が行われた。

その時、塔の礎石の説明をした文化財保護協会長がここに六三メートルの心柱が立ち七重の塔があったと説明したので、大昔に六三メートルの大木を、この礎石の上にとどのようにして立てたのかと質問したら、立てた方法は判然としないが一層、九メートル、七層で六三メートルの七重の塔があったことは間違いないと見てきたような説明をした。

私は町史の製作担当責任者である教育長に町史には七重の塔があったと書かれているが七重の塔があったという確証があるのかと問いただしたところ、朝廷が七重の塔を立てろという詔勅を出しているから、七重の塔が立っていたのでしようとい、確証はないとのことである。

そこで詔勅が発せられたとき、文献によれば全国には六九ヶ国あり、七重の塔が立った確証があるものは山

城、武蔵のほか数例（確証がない）があるにすぎず寺までも立たなかつたものが数例あるとなつてゐる。このような時代に讃岐の国分寺は本当に七重の塔であつたのかと尋ねるとわからないとのことである。

町では史跡まつりの行事として、郷土の歴史についての講演会を開催、元県教育委員会で埋蔵文化財の発掘を担当、現在、四国学院大学で教鞭をとつておられる県下の歴史の第一人者であるM先生を招待して三回にわたり国分寺等についての講演会を行った。

最後に質問がありませんかということで、私が礎石の上に七重の塔が立つていたと云われましたが、今から千三百年の昔に七重の塔をたてるということは大事業であるが、その当時、大工達はどのような鋸を使用していたのかと尋ねるとはつきりとしたことはわかりませんが、三十センチくらいのものでしょうかという答えであつた。

三十センチの鋸で直径約一メートルの心柱が切れますかと聞くと困つた顔をした。

私は自分が知つてゐる鋸の歴史として次のような事を述べた。

鋸の発祥はヨーロッパで、エジプトや中国でも紀元前からあつたといわれているがそれらは銅製であつたと云われている。

日本では、古墳時代の出土品に見られるが歯は三角だが掬角もナゲシもアサリもなく、これらは骨や角を切るのに使用されたらしい。材木の切断には使用されていない。

和名抄には乃保岐利と記載され刀に似ていたという。片手使いの横切り鋸が入つてきたのは平安時代だといわれている。

五三八年 仏教伝来。

五七七年 百濟から造寺工が贈られ、五九六年ころから寺院建築が始まつたと歴史書には記載されている。国が内匠寮を置いたのが七二八年、大工寮を置いたのが八二五年。

などからすると、国分寺建立の詔勅があつた七四〇年ころどのような鋸や大工道具があつたかはわからない。刀の製作方法ははつきりとわかるが、昔、鋸をどのようにして作つたかは文献がみあたらない。現代のような歯をきざんだ鋸はいつごろどのようにして作られたのだ

ろうか。

それから、国分寺歴史資料館には建設の模様を描いたパネルがあるが、現代感覚で描かれているのがおかしい。一番おかしいのは足場の組み方である。

それというのは、七十メートルの高さの足場を作るとなると下部には相当の重量がかかる。当時、針金、釘、ワイヤーロープの無い時代、足場の材木をどのようにして縛り組み立てたかである。

それに当時塔の建設には約四―五十年の年月を要しているから、藁縄などでは持ちこたえない。人生五十年の時代、大工も棟梁も年をとってしまう。

このように考えると、全国には経験を持った大工もいなくなつたし、十分な道具がなくなつたから、塔はもとより寺院さえ建設できなかつた国々があつても当然かもしれない。

底辺十メートルで高さ七十メートルのものを礎石の上に立てた経験のない大工達が地震や台風に対して何の心配もなく着工にかかつたかも疑問である。

七重の塔は文献によれば礎石でなく、掘立式であつたと書かれているものがある。

これでも七重の塔があつたと断言できませんかと質問したら、研究してみますということが終わつた。私は現在、全国に存在するものはほとんどが五重か三重の塔であることからして、礎石の上には、五重の塔が立つていたと思いますがと云つて質問を打ち切つた。

私は現役時代、海上保安官として船舶の衝突、火災などの事故現場の検証をしてきたが、証拠主義であるために歴史学者のような憶測と、講釈師のような見てきたようなことは一度も云わなかつた。宣誓をして裁判の法廷にも立つたが確たる証拠をもとにしていたので事なきをへてきた。

昨今、聖嶽のことが全国紙にとりあげられているが、真実を後世に残すために佐伯史談会では別府大学を除外した当時の現場にいた人から取材して確たる証明をする必要があるように思う。

わが町の文化財保護協会の会長も教育長もみんな元校長という肩書ききでものを云う。

会員の方々にも先生と名のつく人が多いので反感をかうかもしれないが、先生と名のつく人に見てきたような

講釈を云う人が多いのも事実である。

戦時中、教壇に立った先生方は、天皇崇拜の観点から、忠義や神風が吹くなどと歴史を歪曲して教えた人が多い。現代の若い教師は楠正成などといってもあまり知らない。

私は、番匠川を大工の集団が住んでいたところとは思っていたが、源流に匠の字のつく本匠村があるため、上流の方に住んでいたと勝手に理解していたが、この度、昔の大工は大工道具を作るところから始めなければならぬことがわかり、佐伯市の堅田にあった鍛冶屋の工房跡あたりではなかったかと思ったりしている。

私は今、教育長に歴史を書いた町史は未来永久に残すものであるから、一度精査してほしいと申し出ている。佐伯周辺の村、町の歴史書にも曖昧模糊のものもあるように思える。歴史書を一度取り出して精査することも史談会の使命ではないだろうか。

(お願い) どなたか七世紀頃の鋸の作り方がわかる方がいましたら、お教えください。

天平の 礎石に座して 春の夢 幸夫

張弓峠

蒲江町大字丸市尾浦と大字葛原との間にある峠。標高約一五〇メートル。日豊海岸国定公園のうち。北方には国道三八号(佐伯市→延岡)が通り、東の海岸線に沿って、一般県道古江丸市尾線が通っている。

張弓峠は、本来の旧道は小さな岬の尾根を越えるものだが、近年、尾根の鼻をめぐる道がつけられて、車はそちらを通る。旧道はかすかな踏み跡だけとなった。

しかし、景観は新旧ともさして変わらない。新道は断がいの上につけられ、海から切り立つ約七〇メートルの高みを通る。眼下は名護屋湾。深い入り江となり、名の通りになごやかである。あなたには台地のような深島。日向灘からかげろうのように水平線を揺らしていた。(『角川日本地名大辞典』・『大分合同新聞』時シリーズ(133)1)